

吉川英治



二人天皇のいずれが正統なのか。尊氏は逆賊で正成は忠臣か？ 人間の業、権力の魔性故に欲望が狂い踊る無限の暗黒時代をかき探る。

私本太平記

五

六興出版

吉川

私
本
平記

江苏工业学院图书馆章

第五卷

千早帖(続)

新田帖

私本太平記 第5巻（全8巻）

平成2年8月25日 初版発行

平成2年11月10日 2刷発行

著 者 吉川英治

発行者 賀来寿一

発行所 株式会社六興出版

〒112 東京都文京区水道2-9-2

電話 03(943)3431(代表)

振替 東京1-92448

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN4-8453-0411-2 C0093

目

次

千早帖(続)

弱い者たち……………7

釘……………35

難題……………44

矢作の陣……………57

藤蔭秘事……………69

不破やぶり……………82

こぼれ針……………96

夜叉と男……………110

新田帖

大江山

.....

127

六波羅攻め

.....

143

峠

.....

157

怪軍

.....

171

雑草復活

.....

182

千早解け

.....

189

うかれ囃子

.....

205

触れ不動

.....

216

高時曼陀羅	稲村ケ崎	散りいそぐ	暗君片鱗	紫の一本
.....				
280	268	257	246	228

千^ち

早^{はや}

帖^{じょう}

(続)

弱い者たち

冬じゆうにはなかつた。春になつて、それもつい先月頃からのことである。

ときどき、羅刹谷の奥まつたところで、平家琵琶のかなでを独りほしいままにして、都の焦土も、千早金剛のあらしも、いや春蘭けて来た山の色の移りも知らぬかのような者がいた。

ここは、洛東の三十六峰もずっと南端ずれの、世間からいえばほとんど世間外な山寺や古別荘ばかりな所なので、たればかることもいらなないせいだろうか。その撥音は、かの琵琶行の詩句をかりて謂うなら――

大絃ハ嘈々トシテ 急雨ノ如ク
小絃ハ切々トシテ 私語ノ如シ
嘈々切々、錯雑シテ

大珠、小珠、玉盤ニ落ツ
間関タル鶯語
花底滑ラカニ
幽咽スル泉流、氷下ニ難ム

と、いったようなおもむきがあつて、およそそのあいだは、天地のものみな息をのんで、おのがじい小さい生命のまたたきに謙虚な涙をせぐられて来るかと思われるばかりであつた。

こん夜も、崖にのぞんだ高床の廂のうちには、ボチと小さい明りがすだれ越しに見え、室にはうつつなく平家を弾じている一法師の影がある。

法師は盲なのであつた。

からだつき小さく弱々しいが、年のころは二十一、二か。

「……………」

いま一曲を弾き終つたが、なにか自分では、とんと不満であるらしい。
軸をしめ、またやや戻し、軽弄、漫然と絃のしら

べにしきりと首をかしげているのを見て、ふと、おなじ部屋の片すみから、法師の母の尼が、小机こきごしに、眸ひとみだけで、

「……………」

そのさまを見つめていた。

やがて。尼がたずねた。

「覚一、どうかしたの？」

「ええ」

琵琶を膝に立てて。

「へんです。こん夜は」

「そんなことないでしょう。ここで聴きいていましたが、私の好きな『忠度都落ち』のくだりのせいかな、どこかといって」

「いえ、お母かあさんにはそうでしょうが、覚一には何だかいつものようでないです。琵琶のせいでもないらしい」

「では、もういちど、弾いてごらんなさい。母はさつきからここで、さるお方へ手紙をかきかけていま

したけれど、こんどは、そのつもりで聴きますから」

草心そうしん尼は、筆をおく。

そのかすかな音にうなずいて、覚一はふたたび、忠度都落ちの一節を弾だんじ直した。そしてこんどは心ゆくまで気が乗っていた容子ようすのようであつたが——『さざ波や志賀のみやこは荒れにしを、むかしながらの山桜かな』と語りかけたあたりへ来ると、とつぜん、舌打ちするように四絃しげんを一ツぴしゃツと撥はらツて、

「ああ、やはりいけない！」

「どうしてなの、覚一」

「お母あさん。……どこかに人の気配がしませんか」

「いいえ、たれも」

「床下だ。私のいるこの部屋の下にちがいない。人間がいる」

「えっ？」

草心尼は血のけをひいた。

——この床下にたれか人間がひそんでいる？

思うだけでも、ぞーと、草心尼は肌がさむくなつた。

「まさか」

然し、この子のかんは時により吃驚するほどよく中る。もう二十歳をすぎた覚一なのだが、いまだに母の彼女には、いちいち「この子は。この子が」であつた。手をひいて都の空へのぼつて来たあゝのころも今も、それはちつとも變つていない。

「……検めてみましょう」

やがて覚一が、膝の琵琶を、そつと横へおきだしたので、彼女はあわてて。

「およしっ。覚一」

「でも、気にかかるではありませんか。気味がわるい」

「ですから、怪我でもするといけないもの。ひよつと盗人でもあつたら……」

「盗賊ならなお心配はいりません。欲しい物を持つて行かせればいいのです。お母あさん、紙燭をともしてください。そして私の手に持たせてください」

「だって、そなたは盲なの」

「私には無用ですが、床下に潜んでいる者が不覚な狼狽をせぬように明りをみせてやるのです。ご心配なされますな」

覚一はまもなく、小さい紙燭の灯を片手に、廊の簾の外へ、足さぐりで出て行つた。

朽ちかけた欄干の下は、ほそ谷川の水音だつた。

覚一のつま先と片手の指は、やがてつきあたりの杉戸に触れた。

とたんに、その明りのゆらめきを下で破つて、カサツと、生き物でも刎ね飛ぶような音と共に、何か黒いものが、勢よく崖をよぎつて、どこかへ消えてなくなつていた。

「……………？ ア、逃げた」

覚一はほつと四山の冷氣に顔を撫でられた。すぐ

後ろへ、尼も寄りそつて来ていたのである。動悸のしずまるのを母子はひとつに聴きすましていた。

「いったい何者だったのだろう。」

「恐い、と思ひだしたら居たたまれぬようなものがある。ここは名からして羅刹谷であり、多くの死者が眠っている鳥部野もほど近い。」

「すぐる年には、足利高氏の一勢が、しばらく住んでいたことのある古館だが、それは武者大勢してのことだった。いまは母一人、子一人ぼっち。」

「でも覚一は、ここが気に入っていた。——ついこの間までいた小松谷の探題北条仲時の邸よりは、山静かだし、武者出入りもなし、何よりはまた、琵琶を弾くにも歌うにも、たれに気がねもいらぬのが好ましく、

「いつまで居たい」

と、いつているほどのだ。

これも先月の赤松勢の洛内乱入のせいだった。

——新帝以下、すべて六波羅へ疎開され、そのおび

ただしい方々のお住居には、探題邸をも明けねばならないことであつた。——草心尼母子が他へ移されたのもそのためで、またそれほど都のまもりがいまは危険にひんして来たことでもあつた。

「おやつ。か、覚一」

「どうしましたお母あさん」

「なんである。また松明のあかりが彼方から見えてくる」

「え。こちらへ向つて」

「おお、大勢で」

怪しむまもなく、たちまち六波羅兵の十数人が、手の松明をかざして、欄の下に近づき、

「この家のお人か」

と、上へ誰何した。

草心尼が「そうです」と答えると、仲間同士で何かささやきあつていた兵は、ふたたび、

「では、探題殿の懸り人の……琵琶法師とかいう母子のお方か」

と、かきねてきいた。

「はい。先の月、小松谷からここへ移つて来たものですが」

「それは」と、兵の中のかしら立つた者がちよつと礼を見せて、

「お驚かせして、相すまんことでおざつた」

「何かあつたのですか。こん夜」

「たそがれこの近くで、一人の曲者しれものを捕り逃がし、それを狩りたてていたわけなので」

「盗賊でも」

「いや以前、六波羅で放免がしらをしていた忍の者でおざる。それだけに素ばしっこい。今もこの古館ふるだちのへんで見たとの知らせに、すぐ馳かけつけて来たのとおざるが」

兵のかしらは、そう話してから、高床の床下を覗のぞきこんだり、ほそ谷川のあなたこなたへ、松明を振らせてしきりに騒ぎぬいたすえ、やがて高欄こうらんの簾すのうちを見上げて、

「どうもお騒がせ申した」

と、わび、

「もしまた、明日にでもあれ、怪しき男がこのへんを徘徊はいかいしていたら、おそれいるが、お下部しもべでも走らせて、ちよつと月ノ輪の屯たむろまでお知らせくださるまいか。念のため、申しおくならば、その曲者は三十六、七の眼のするどい雑人態ざうにんたいの男でおざる」

と、いいおいて立去つた。

母子おやこはとうに部屋へやの簾を垂れて、その声にも姿をみせず、また返辞の要もないので、去り行く足音だけを黙つて聞いていたのであつた。

——ふと、こんな小夜さよのあらしは過ぎたものの、覚一さくいちは何か索然さくぜんとしたこちで、もう琵琶を取りあげる気にもなれないでいた。

「……お母あさん」

「なあに」

「まだお手紙のつづきを書いていらつしやるのですか」

「もう終わりました、やっと」

「ずいぶん長くかかっていらつしやいましたね。鎌

倉おほの小母おほ（高氏の母、草心尼の義姉）さまへですか」

「いいえ」

「では……。ああわかった」

「あててごらん」

「三河のいっしきむら一色村にいまするお方でしょう。あの、藤夜叉ふじやしやと仰おほつしやるおひとへ書いたんではありませんか」

「そうです。よくわかるのね、そんなことまで」

「だって、この春その藤夜叉さんから大そう長い長
いお便たよりりがあつたのに、ご返事も書けずにいると、

日ごろお母あさんも苦にしていたではありませんぬ
か」

「そう。やつとそれをこん夜書いたのだけど、文字
というものは、不便なものね」

「けれど恋歌などは、わずかな字かずで、どんな思
いも思う人につたえるではありませんか」

「ま。この子が」

と、母の眼は驚きをもった。

「いつか恋歌なども知っているのね。ところが、藤
夜叉さんの持つ悩みは、そんなきれいな、やさしい
悩みではないらしいのよ」

「悩み？」

覚一は、小首をかしげる。

「……藤夜叉さんは、それをお母あさんに訴えて来
たんですか。いつかの長いお手紙で」

「ええ、あのおひとの以前は、人も知るように近江
の田楽女でんがくひめ。……ですから、文字は子どものような稚
拙せうで、文ふみのつづりもたどたどしいのだけれど、よほ
ど思いつめて書いたのですよ。ほかに、打明ける
人もないといって」

「どんなことを」

「それがね」

と、草心尼は何事にもかくしへだてのない子の覚
一にさえ、ちよつと言いいくそう言いい濁りをかす
めて。

「なにしろ、そんなお文なので、文字の裏から察し
るしかないのだけれど、どうも去年の春のことらし
いの」

「去年の春？」

「高氏さまが、一時この羅刹谷を御宿所としていた
頃がおありだったでしょ」

「あ、そのころ、藤夜又さんが、お子の不知哉丸さ
まを連れて、一色村から都へ出てきたことがありま
したね。そして私たちのいる小松谷のおやしきに、
しばらく滞在しておいでだった」

「ところが、かわいそうに、高氏さまはすげなく鎌
倉へおひきあげになってしまった……。そしてそれ
からの事でしたろ」

「そうそう、あれは後醍醐のきみが、隠岐へおうつ
しされるというので、洛中洛外、大へんな雑鬧の日
でしたね。藤夜又さん母子も、三河へ帰るといつて、
小松谷のおやしきを出て行つたが」

「その夕の事。東寺のへんで不知哉丸さまがお一人

で、迷子になって泣いていたと、検非違使の者から
小松谷へ知らせがあり、仲時殿はじめ、私たちも、
仰天したけれど、かいもくその当時は、母御の藤夜
又さんの方は分らずじまいでした……。それからも
私たちには、一体何事が起つていたのか、ただ不審
で過ぎてしまつていただけねど」

「でも、そのごは一色村へ帰つて、お子の不知哉丸
さまと一しよにお暮しなんでしょうに」

「そうなの……そうなんだけれどね、そこにあのひ
との、何かの悩みが今もつて、心の深いきず痕にな
つてゐるらしいのね」

「だから、それは何なんです」

「書いてないんです、はつきりとは」

「書いてなくては、慰めて上げようもないではあり
ませんか」

「けれど女の私には、そんなときの女の身にどんな
事が起つていたか、分らなくもない」

「へ。わかるんですか」

「きれいな女のひとにはね」

彼女は、それだけを言つて、ふと黙つた。

もう遠い以前だが、足利ノ庄にいたじぶん、姉の使で、隣国の新田義貞のもとへゆき、その晩、義貞にせまられて、恐ろしい桜吹雪のやみを跣足で逃げ走つたことなども——かつてまだ子の覚一にはおくびにも話してはないのである。

藤夜又の手紙とても、決して男の名とか、佐々木道誉への恨みなどを、あらわに書いているのではなかったが、女の秘密といい、心身のくるしみと言つてあれば、もうそれだけで、尼の身の彼女にも、或る察しと、思いやりはつくのであつた。

「そして？……」覚一はなお訊きほじつて。「お母あさんは一体、どういうご返事を藤夜又さんへ書いたんですか」

「いつの世でも、女の道はけわしいもの、と」

「それはお母あさんの、ご自分の身上も言っているのでしょ」

「そうなの。私には、おまえというものがあるので、どんなむごい月日に会つても、これきりだの、もう駄目だのと思つたことはありません。……おなじことは、藤夜又さんにも言えるでしょう。あのお方も親一人子一人のようなものですからね」

「それに、高氏さまというお方も、いらつしやる」
「でも、いろんなご事情から、高氏さまはまだ、不知哉丸さまとは、ご父子のご対面もなされていませんし、藤夜又さんも日蔭のひとでしかないんですよ」

「……………」

「だから女とすれば、あれこれ悩むのもむりはない。そのうえ藤夜又さん自身にも、何か、ふくざつな事情があつて、去年一色村へ帰つてからも、日夜、そのことで苦しんでいるらしいんです。……ですから、ひたすら和子のお育ちのみを愉しみに、ご信心でもなされたがよいと、私の地藏菩薩のお影像を手紙のうちに上げて上げようかと思つているの」

「地藏尊のお絵をですか」